

派遣し、それぞれの立場から支援・指導を行い、成果を上げている。

通常学級における特別支援

沼田 勉

通常学級の担任、及び学年主任として、生徒の実態をふまえ、個に応じた指導と集団の特性に応じたクラス経営を実践した。いくつかのポイントをまとめた。

1. 生徒との人間関係を築く

(1) 生徒との人間関係を築く：人の話を静かに聞くことができない集団では、生徒と1対1の人間関係を確立してから集団としての落ち着きをねらわなければならない。また、教師側にも話の内容を短く明確なものにするなど、聞かせるための工夫が不可欠である。

(2) 教室の美化：落ち着きのない集団が過ごす教室は汚い。ゴミを平気でどこにでも捨てるという意識が蔓延しているからだ。学習環境が乱れていては生徒の向上は望めないと考え、教室の美化に取り組んだ。生徒の中には、担任は自分たちのために何かをしてくれているのだ、という意識が芽生え、ゴミの量が減ってくるとともに生徒の落ち着きが出始めた。

2. 授業をする上での配慮（国語科）

生徒は本来、わかりたいという気持ちを持っている。今日の授業を聞けば何ができるようになるかを予告し、その重要性を強調して告げる（目標の明確化）ことで生徒は授業に引き込まれる。そして、最後にできたことを確認することで成就感を持つのである。

3. 専門機関との連携

専門機関につなぐ場合は、保護者に「本人がこういうことで困っている」という事実を伝え、あくまでも本人のためであるという観点で勧める。そのために日頃から保護者と教員のコミュニケーションを取り、生徒が健やかに育つための協働関係を大切にしている。

コミュニティ・サポートの視点

佐藤 秀明

1. 養護学校と特別支援教育

文部科学省が「障害の程度に応じ特別の場で指導を行う『特別支援教育』への転換」を明確にしたことで、養護学校の地域におけるセンター的機能としての役割と小・中学校が必要としている特別な支援教育をようやく一つの連続性の中で考えることができる基盤ができたが、養護学校のためのガイドラインができていない。

2. 小・中学校の特別支援教育

学校教育の現場では、アセスメントに不可欠な心理検査を十分に機能させることができないでいる。検査の方

法や検査結果としての数値を出すことはできても、その数値に基づく解釈やプロフィールの分析には至らず、せっかくの検査結果をその子の指導計画に生かすことができないケースが数多く見られた。しかし、今後は個別の支援計画、個別の指導計画、個別移行計画等を作成していく際には必要不可欠のものである。心理検査は、アセスメントだけでなく、教育相談や学校・保護者に対するコンサルテーションにも必要な資料の一つである。必要なのは、“すぐれたアセスメントツール”に基づく子どもへの教育的なアプローチとコミュニティを視野に入れた“すぐれたコーディネーター”である。

3. 特別支援教育とコミュニティ

教育現場での“すぐれたアセスメントツール”とは、判断するためだけのものではない。特に専門委員会は、検査中の様子や検査の結果を分析して具体的な支援に結びつけていくことが大切であり、学校生活での情報収集力や関係機関との連携が重要である。そして“すぐれたアセスメント”は、子どもにとってよりよい学習スタイルや生活スタイルを見つけ、子どものよさを生かしていくことにある。その実現に向けて家庭・教育現場・地域がひとつのコミュニティとして互いにに関わり、チームとして支援していく必要がある。

指定討論

下司 昌一

本シンポジウムで、山岡氏は生涯を通じた支援を行うために個別の指導計画及び、個別の教育支援計画の整備の必要性を述べ、さらに現在国会で検討されている「発達障害者支援法」の成立が望ましいとの提言を行った。昨年まで教育センターに勤務していた水上氏は、専門機関から学校現場への支援のあり方について報告を行った。中学校に勤務している沼田氏は、通常学級担任の立場から多様な生徒に対する支援の実践例を報告した。さらに佐藤氏は養護学校が地域におけるセンター的機能を担うこと及び地域支援システムの重要性について提言を行った。このシンポジウムに参加して、筆者は話題提供者の発言から、特別支援教育が各地で着実に拡がりつつあるとの実感を持つことができた。周囲の学校に目を向けてみると、特別支援教育の導入は不十分との印象を持ちやすいが、全国的にはLD・ADHD等の教育への大きなうねりが生じているのである。今後、特別支援教育が展開されるに従って、通常学級に在籍する特別な教育的ニーズを持つすべての児童生徒に対して支援の輪を広げていくことの必要性を感じた。LD・ADHD等への支援を契機として、一人ひとりの児童生徒に目を向けた教育が実現されることを願いたい。